

02	一宮	西成小学校	シバタ エミコ	
			名前	柴田 絵美子
分科会番号		2 0	分科会名	総合学習

1 研究主題

「子どもたちが生き生きと活動する総合的な学習の時間の展開」
～主体的に社会と関わる子どもの育成を目指して～

2 研究のねらい

本年度、本校は「チーム西成」を合言葉に、温かい人間関係の中で、互いに笑顔で認め合い、自信をもって生活できる児童の育成を目指している。この経営方針の下、本学年においても総合的な学習の時間の充実を図っている。昨年度は、3年生として「西成大根」の栽培を通し、地域の伝統や食の尊さを学んできた。今年度は、その学びをさらに発展させ、身近な環境問題である「ごみ問題」を対象に、児童一人一人が課題を「自分ごと」として捉え、実践する力を育んでいきたいと考えた。

本実践では、ごみ問題への探究を通して、単なる知識の習得にとどまらず、当事者意識をもって「自分にできること」を決め、主体的に行動する力を育成することをねらいとする。

具体的な手立てとして、1学期には環境センターの見学を実施する。事前学習では、日常的に家庭や学校で排出されるごみに目を向けさせ、「このごみはその後どうなるのか」という問いを明確にさせる。各自の疑問を抱かせた上で見学に臨ませることで、目的意識をもった情報収集活動へとつなげていく。見学後は、班ごとの発表会「きらわくエコレンジャー」を行う。「伝える」という明確な目的を設定することで、児童が自らの考えを表現したり、互いの考えを共有し協働的に活動したりする姿を期待できる。さらに、他者の発表を聞くことで、ごみ問題に対する多様な見方・考え方に触れ、環境への意識を深めていく。

2学期には、1学期の学びを基盤とし、児童が自ら企画した「校内の資源集め」を実践する。自分たちの行動が学校や社会の役に立っているという実感を伴わせることで、自己肯定感や自己有用感を高め、将来的には持続可能な社会の創り手として、地域や社会へ貢献しようとする主体的な態度を養っていききたい。

3 目指す児童像

自ら環境問題について学び、主体的に地域や社会へ貢献しようとする児童

4 研究の仮説

仮説1 「つかむ」の段階において、日常の事象に基づいた調べ学習や施設見学など、幅広く学ぶ場を設定することで、環境問題に対する児童の関心と問題意識を高められるであろう。

仮説2 「まとめる・活用する」の段階において、自ら探究し、協働的にまとめた内容を他者へ「伝える」場を設定することで、自身の行動の変容の必要性を自覚させ、主体的に地域や社会へ貢献しようとする態度を育めるであろう。

5 研究の方法

(1) 研究の手立て

【仮説1に対して】

手立て① 身の回りのごみ問題について興味・関心をもたせ、幅広く学ぶ場を設定する。

- ・「家庭でのごみ調べ」を実施し、どのようなごみが排出されているのか現状をつかませる。
- ・自身のごみ分別の現状を想起させ、それが正しいかどうかを問い直させる。

手立て② 体験学習や調べ学習から、自分が得た知識をまとめる場を設定する。

- ・環境センターの見学や職員の方からの講話を通して、ごみ処理の現状を正しく理解し、自ら行動しようとする意識を高めさせる。
- ・環境センターの実際の手続きを見学することで、課題点や改善点を発見させる。

【仮説2に対して】

手立て① 発表会「きらわくエコレンジャー」を実施することで、多様な見方・考え方を共有する。

- ・発表会に向けて、各自がごみ問題について興味をもった個別の課題についてさらに探究させる。
- ・調べたことに対して自分の考えをもち、グループで共有して発表に向けて協働的にまとめさせる。
- ・「きらわくエコレンジャー」の発表を互いに聞き合い、他者の意見を取り入れることで自らの考えを深めさせる。

手立て② 国語科・社会科と関連づけた活動及び実生活への還元

- ・国語科「お礼の気持ちを伝えよう」の単元と関連し、環境センターの職員の方へお礼の手紙を書くことで感謝を伝え、学んだ内容を実生活に生かそうとする心情を高める。
- ・国語科「新聞を作ろう」の単元と関連し、これまでに獲得した知識や考えを環境新聞としてまとめる。
- ・調べたことや考えたことをもとに、実生活において自分で実践できる具体的な行動を考案させる。
- ・ごみ問題での学びを足がかりに、それ以外の地球規模の環境問題へと視野を広げさせる。

(2) 活動計画

	4 月	5 月	6 月	7 月	2 学期以降
つかむ	【家庭のごみ調べ】 ・どのようなごみを捨てているか現状を調査する。	【環境センター】 ・見学や職員の方の講話から直接学ぶ。	【きらわくエコレンジャー】 ・調べたことをまとめ発表する。	【振り返り】 ・これまでの学びを振り返り、意見を交流する。	【資源集めなど】 ・校内の資源集め。 ・SDGs について調べる。
探究する	・いろいろな種類のごみがあることについて知る。 ・社会科「ごみのゆえ」	・環境センター事前学習	・見学のメモ、本やインターネットで調べる。	・国語科「お礼の気持ちを伝えよう」 ・国語科「新聞を作ろう」	・自分たちで取り組めることについて考え実践する。 ・他の環境問題についても調べる。
まとめる	・ごみの分類について知る。	・見学を終えての感想	・調べて考えたことをまとめる。	・自分たちでできることについての意見交流	・他の問題についても調べ、考えを深める。

6 研究の実践と考察

(1) 仮説Ⅰに対して

手立て① 身の回りのごみ問題について興味・関心をもたせ、幅広く学ぶ場を設定する。

○「家庭でのごみ調べ」の実施と現状把握

児童の日常に潜む課題に目を向けさせるため、社会科の「ごみのゆくえ」と関連させ、週末の3日間にわたる「家庭でのごみ調べ」を実施した(写真1)。児童は自身が日常的に排出している紙ごみやプラスチック包装資材の多さに驚くとともに、家庭から出る野菜くずや自身の食べ残しによって、ごみの全体量が増加しているという現状に直面した。振り返りには「普段は意識していなかったが、想像以上に多くの種類と量のごみを捨てていたことに気付いた」という記述が見られ、身近な課題に対する関心が大きく高まった。

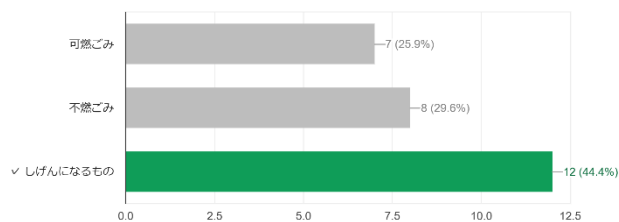
生ごみが1日でスーパーのビニールぶくろが13分ほどでいっぱいになります。
紙ごみは1週間ですぐに30リットルでいっぱいになります。
プラスチックごみは、食べ残しや野菜くずによって、ごみの全体量が増加しています。

「家庭でのごみ調べ」(写真1)

○ごみの分別意識の現状把握

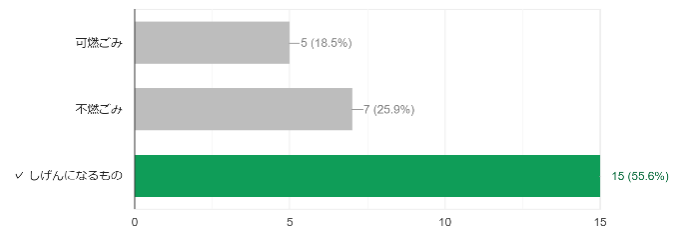
市内指定のごみ袋(可燃ごみ、不燃ごみ、資源になるもの)を実際に提示し、分別の知識に関するアンケートを実施した。「ペットボトルが資源になる」と正しく答えた児童は44%、「アルミ缶」は55%にとどまり(図1・2)、身近な資源のリサイクルに対する意識や知識が十分ではない現状が浮き彫りになった。

ペットボトル
正解 12/27 件



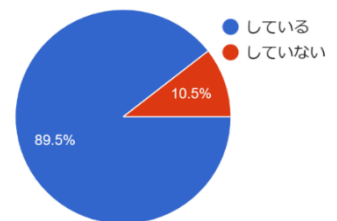
ごみ分別についての知識「ペットボトル」(図1)

アルミ缶
正解 15/27 件



ごみ分別についての知識「アルミ缶」(図2)

また、日常生活でのごみ分別について調査したところ、約10%の児童が「分別をしていない」と回答した(図3)。さらに、分別を行っていると言った児童の中にも、正しい分別の仕方が定着していないケースが多く見られた。この結果から、今後の学習において正しい知識を身に付け、主体的に行動できる能力を育む必要性が確認された。



ごみの分別を行っているか(図3)

手立て② 体験学習や調べ学習から、自分が得た知識をまとめる場を設定する。

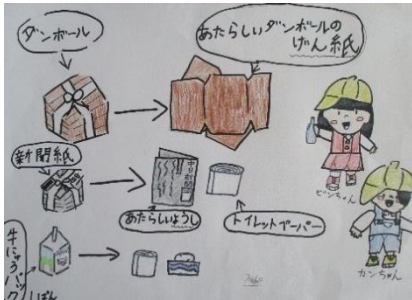
○環境センター見学による体験学習

社会科副読本「わたしたちのまち一宮」や事前に配布されたパンフレットを活用した学習を経て、環境センターの見学に赴いた。ごみピットで行われる迫力あるクレーン作業を間近で見学することを通して、児童は自分たちの日常の行動である「分別」や「正しいごみの出し方」がその後の処理に重要な影響を与えることを直感的に理解した。また、職員の方の「このままのペースでは、最終処分場

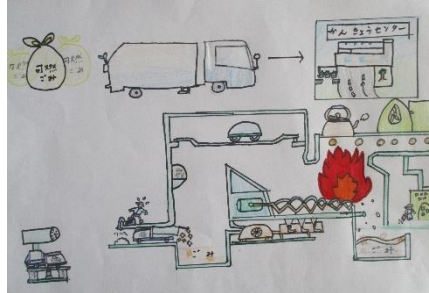
りする工夫を凝らした（写真6・7）。発表原稿の作成や役割分担など、発表会の成功に向けて互いに声を掛け合いながら、協働的に作業を進める姿が随所に見られた。

○「きらわくエコレンジャー」発表会の実施

発表会は学校公開日に設定し、保護者や地域の方々に向けて実施した。児童は「きらわくエコレンジャー」として、「地球の未来を守るために、ごみや資源に関する正しい知識を広めよう」という強い使命感をもって発表に臨んだ（写真8）。この活動を通じ、ごみ問題に対する多角的な視点やアイデアがクラス全体、さらには家庭へと共有された。



発表で使った資料(写真6)



発表で使った資料(写真7)



発表の様子(写真8)

手立て② 国語科・社会科と関連した活動及び実生活への還元

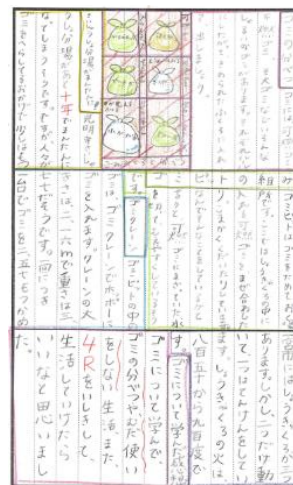
○国語科「お礼の気持ちを伝えよう」との関連

環境センターの職員の方へ感謝の手紙を執筆した。「毎日大量のごみを処理してくださり、本当にありがとうございます」「ぼくも分別をして地球を守ろうと思いました」といった、感謝の心情と今後の決意が結びついた記述が多数見られた（写真9）。

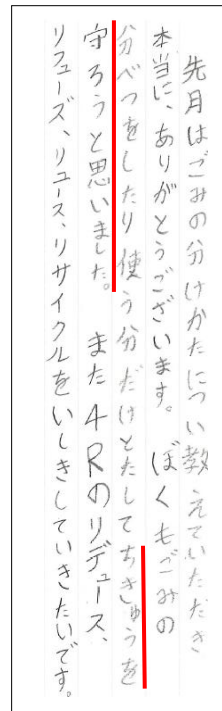
○国語科「新聞を作ろう」との関連による環境新聞の作成

これまでの総合的な学習の時間での学びの集大成として、各自が調べたことや考えたことを環境新聞にまとめた。総合的な時間を核とし、社会科および国語科の学習活動を効果的に関連させた教科横断的なカリキュラム・マネジメントを展開したことにより学びの相乗効果が発揮された。児童は国語科で学んだ見出しの付け方や割り付けの工夫を生かし、個性豊かで説得力のある環境新聞を完成させた（写真10）。

さらに、この活動は想定以上の発展を見せた。一部の児童が自主的に「クラス的环境新聞」という活動を立ち上げ、日々の新聞紙面から環境に関わるニュースを見つけ出しては毎日集めて掲示する行動を起こした。これは、単に与えられた知識を消費するだけにとどまらず、自ら情報を取捨選択し、他者に伝えようとする主体性が高まったことを示す行動変容の現れである（写真11）。



個人の環境新聞(写真10)



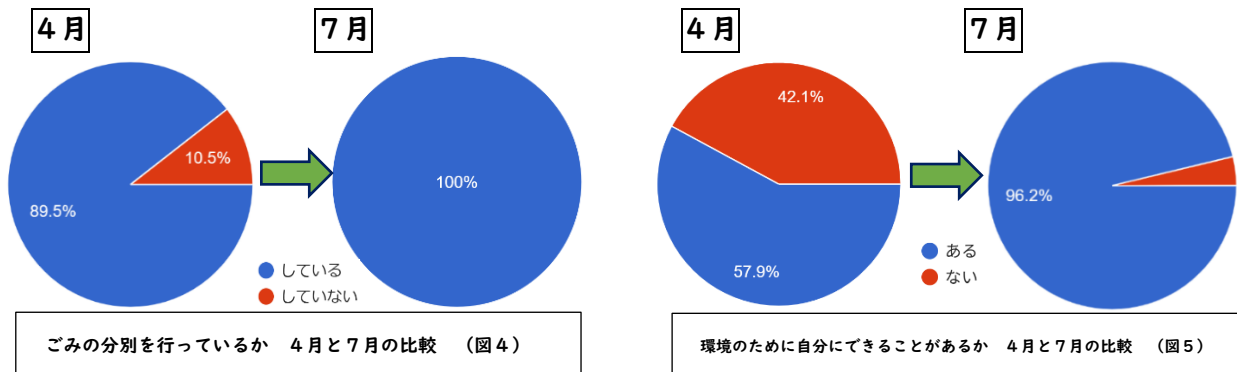
手紙の内容(写真9)



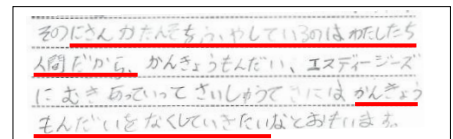
新聞記事を集めた環境新聞(写真11)

7 研究の成果

一連の学習活動を終えた7月に、再度ごみ問題に関するアンケート調査を実施した。その結果、「ごみの分別を行っているか」という問いに対して、4月の時点の状況から大きく改善し、100%の児童が「分別している」と回答した（図4）。また、「環境のために自分ができることがあるか」という問いに対しては、「できることがある」と肯定的に答えた児童の割合が、4月と比較して約40%増加した（図5）。事前の調査ではリサイクルや環境への意識が低かった児童が、調べ学習、環境センターの見学、そして事後の探究活動を通して、「自分の出したごみに最後まで責任をもつ」という、課題を「自分ごと」として捉える当事者意識を獲得した結果であるといえる。



また、「きらわくエコレンジャー」発表会の成功や、児童が自主的に始めた環境新聞づくりに代表されるように、日常生活の中で常に環境問題へ目を向け、自ら発信しようとする姿が定着した。これは、総合的な学習の時間・社会科・国語科を関連させたカリキュラム・マネジメントにより、インプット（見学・調査）からアウトプット（発表・手紙・新聞作成）への流れがスムーズに機能したためである。結果として、児童の表現力、情報活用能力、そして協働的な問題解決能力が向上したことが本研究の大きな成果である。



8 今後の課題

1学期の学習を終えた振り返りにおいて、児童からは「自分でできることは、まず物を無駄遣いしないことだと分かった」「二酸化炭素を増やしているのは私たち人間だから、環境問題をなくしていきたい」といった深い実感を伴った記述が多数見られた（写真12）。今後の課題は、1学期に培われた高い環境意識を、いかにして具体的な持続可能行動に移行させていくかという点にある。児童の間からは、昨年度も取り組まれていた「校内の資源集め」を自分たちの手で実践したいという具体的な声がすでに上がっているため、2学期以降にこの実践を実施していきたい。資源回収活動を学校全体で展開することにより、「自分たちの行動が地域や社会へ主体的に貢献している」という実感をさらに深めることができると考えられる。

さらに、児童の振り返りには、今後はごみ問題にとどまらず、SDGsの理念、地球温暖化のメカニズム、海洋プラスチックごみ問題など、より広範で深刻なグローバル課題について学びを深めたいという意欲的な記述も見られた。今後は、これらの知的好奇心に応える教材開発を進め、児童の知識と思考をさらに深化させていきたい。その際、児童が「主体的・対話的で深い学び」を実現できるよう、カリキュラム・マネジメントのさらなる工夫が求められる。未来の持続可能な社会の創り手となる児童が、いかに自己肯定感や自己有用感を高められるかについて、今後も探究を重ねていきたい。

児童の振り返り（写真12）